

【学会レビュー】

日本マンガ学会第7回大会

木内英太

2007年6月16日と17日の2日間、初日は京都精華大学黎明館において、2日目は京都国際マンガミュージアムにおいて第7回日本マンガ学会大会が開催された。1日目は「フランスにおける若者マンガ読者層とBD」、「華君武による猪八戒イメージの利用」、「『嫌韓流』は如何なる蒙を啓くのか?」、「手塚治虫と《生命メタモルフォーゼ》」、「あだち充と岡崎京子 両作家における死のテーマ」、「マンガの3要素から見た表現構造の歴史の変換について」、「マンガの図像における「記号性」について」、「エッセイマンガの成立過程 『別冊少女コミック』におけるマンガ家の表象に着目して」という発表があり、マンガ研究の範囲の広がり、そして深化を感じさせた。

2日目のシンポジウムのテーマは「世界の日本マンガ事情」であった。第1部ヨーロッパ、第2部アメリカ、第3部東アジアで、実際に日本マンガの紹介や輸入や翻訳出版をしている方々にお話を伺い、質疑応答がなされた。

第1部ヨーロッパでは、日本マンガの海外進出において日本で感じられるように年々ブームが広がっているだけではなく、市場が飽和状態になってきているという楽観的ではない意見も聞かれた。海外でも「オタク」は人口の一定数の割合に限られるようで、市場の拡大は止まってパイの奪い合いになっていくらしい。イタリアでは90年代に「セーラームーン」に対して、女の子同士が仲が良いのでそれを見た子どもたちが女も男も同性愛

者になってしまう、という批判があったという話には文化の違いを感じさせた。

アメリカは国土が広い国で流通システムが複雑であり、印刷所から全米に流通させるのに一週間ほどかかるという。そのような状況で単行本だけでなく『SHONEN JUMP』『Shojo Beat』というマンガ雑誌を売るために、啓蒙活動としてティーンエージャー向けファッション雑誌にマンガになじんでもらうためにマンガを連載したり、世界各国で日本のマンガスタイルで描くマンガ家を育成したりと、さまざまな策略をしているという。そんな現状が語られた。

東アジアは、日本のマンガがけっこう昔から伝わっていた地域であり、海賊版やバッシングの問題などについて、たとえば中国で正規版を出すために国の新聞出版総署というところに申請しても理由もわからず断られてしまう苦勞など、興味深い話が聞けた。

このシンポジウムでは、アメリカで日本マンガを出版している会社である TOKYOPOP から、参加者に一人一冊ずつマンガが配られた。筆者は CLAMP の翻訳をいただいた。

なお、小学校の跡地を利用して最近オープンした京都国際マンガミュージアムは、日本マンガ学会の事務局が置かれ、企画展示だけでなく、マンガが大量に保存・展示されており、珍しいマンガや懐かしいマンガを手にとって読むことができる。